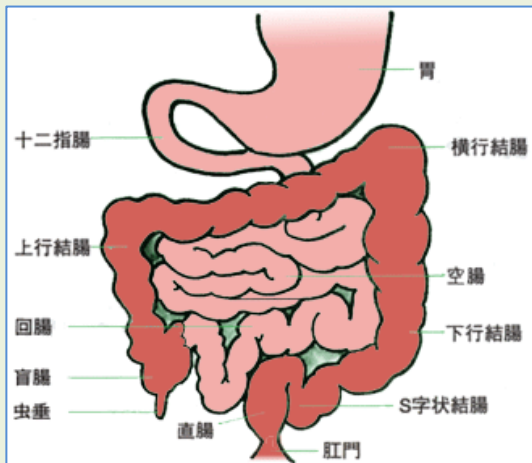


おなかの症状と『腸』について

おなか痛い、下痢など、おなかの症状を経験されたことがある方は、たいへん多いのではないのでしょうか。おなかの中には、いろいろな内臓がありますが、おなかの症状は、胃腸の不調からくるものが多く、ほとんどが一時的なもので改善しますが、慢性的に症状が続き、積極的な治療が必要となる場合もあります。今回は『腸』について全般的に解説します。

● 腸の構造

腸は食物の通り道である消化管（口、食道、胃、小腸、大腸、肛門）の一部で、小腸と大腸に分けられます。さらに小腸は口側から順に、十二指腸、空腸、回腸に、大腸は結腸、直腸に分けて名づけられています。



● 腸のはたらき

胃腸は体の中にありながら外界とも接する器官で、侵入してくる病原菌や有害な化学物質等の異物から自分の身を守るために、数多くの免疫防御機構が備わっています。特に腸は、人体最大の免疫器官と言われていて、リンパ球（外界の敵から守ったり攻撃したりする細胞）の多くが腸に集まっています。



また、腸は第二の脳とも言われており、独自の神経系によって各器官と連携しながら体の維持機構に重要な役割を果たしています。

● 小腸のはたらき

小腸は消化管の中でもっとも長い器官で、解剖学的には約6メートルと言われていますが、お腹の中で折りたたまれた状態では2~3メートルほどになります。

小腸の壁の内側には、輪状ひだという横ひだが無数にあり、その表面は絨毛、さらに微絨毛という細かいひだが密集しています。その表面積は、約120畳分の広さに相当し、効果的に栄養素を吸収することができます。

小腸は、特有の蠕動運動と、胃・十二指腸や胆嚢、膵臓から出てきた消化液の働きによって、最終的に消化と吸収のほとんどを行っています。

● 大腸のはたらき

大腸は、結腸と直腸に分けられ、結腸はさらに、盲腸、上行結腸、横行結腸、下行結腸、S状結腸に分かれます。また、盲腸の先端には虫垂があります。

結腸の主な機能は、小腸から流れてきた食べ物のカスや細胞の死骸を水分と混ぜ合わせて適当な形の便にすることです。この混合物がS状結腸付近に運ばれてくるころには、適度な硬さの便になっています。

便は少しずつ直腸に運ばれ、直腸が便でいっぱいになると、脳がそれを便意として感じ取り、肛門が開くと排便します。



宮川 佳也 先生

日本内科学会認定医、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会指導医、日本消化管学会認定医
2015年4月より日本クラブ診療所にて「内視鏡検査」を担当。胃腸に限らず消化器疾患の診療経験が豊富。

(次ページへつづく)

● こんな症状はありますか？

急な腹痛

痛みの場所、いつからか、どんな痛みか、食事との関係、熱はあるか、鎮痛剤などの薬を服用したか、他の症状などをチェックして病気を推測します。



ずっと続く腹痛

我慢できる程度の痛みがダラダラと続いたり、間欠的に繰り返り起こる場合は慢性の炎症や腫瘍、機能異常などが考えられます。

下痢

急に起こったか、慢性的に続いているか、血便や粘液が出るか、腹痛、発熱や体重減少などを伴うかなどを確認して、どんな病気か判断します。

便秘

排便の周期は個人差がありますが、通常3~4日以上排便がない時や便が硬い、コロコロしているという時に便秘とよぶ事が多いです。腸の動きの異常が原因で起こる機能的便秘と、腸に腫瘍などのできものできて起こる器質性便秘があります。便が細い、血便が出る、便がまったくでない、おなかが張って痛む、などの症状がある場合には大腸がんの可能性もありますので、お早めに医療機関に受診して下さい。

● 検査の方法

問診と診察（視診、触診、打診、聴診）によってある程度の方角性を検討し、病気を推測していきます。

健診などでよく行なわれる「便潜血検査」では、便の中に肉眼では見えない血液成分があるかどうかを調べます。これだけでは病気の種類は判断できませんが、便潜血が陽性つまり血液成分が混ざっている場合には大腸にがんなどの腫瘍や炎症などがないかどうかを調べる検査を検討します。

「下部消化管造影検査」は肛門から造影剤(バリウム)と空気を入れて、体位を変えながらレントゲン撮影をします。

「下部消化管内視鏡検査(大腸カメラ)」は肛門からファイバースコープを挿入して大腸全体を観察します。大腸の中を直接観察できるため大腸がんやポリープ、炎症などが分かりやすく、病変があれば組織を一部採取してどんな細胞か検査することができるためとても有用です。

他に、「単純X線撮影」、「CT(コンピューター断層撮影)」、「MRI(磁気共鳴画像検査)」、「超音波検査」などの画像では腸の

状態を間接的に調べます。腸の中の小さい病変は分かりにくいですが、腸やその周囲の全体的な状況をイメージすることによって、診断に必要な情報を得ることができます。



● 腸の病気

腸の病気にはいろいろなものがありますが、その中でも主な病気について説明します。

急性腸炎

急に腹痛と下痢が起こり、原因として食べ過ぎ飲み過ぎなどで一時的に腸に負担がかかった時におこるものや、ウイルスや細菌などの感染によっておこる腸炎があります。

虚血性大腸炎

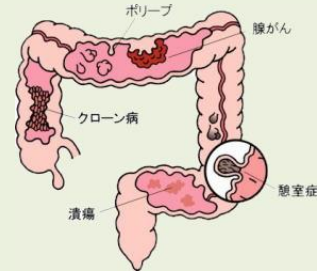
腸を栄養する腸間膜動脈の血液の流れが一時的に悪くなることによって、腸の血液めぐりが悪くなり、発赤、浮腫、びらん(表面のただれ)、潰瘍などが一時的にできる病気です。突然の腹痛や血便、下血が主な症状で下行結腸やS状結腸に多く発生します。

炎症性腸疾患

腸にびらんや潰瘍など慢性的に炎症をおこす病気で、代表的なものとしてクローン病や潰瘍性大腸炎があります。慢性的に長く続く下痢、血便、腹痛などの症状があるときに疑います。原因は完全には解明されていませんが、腸管の免疫系の異常と考えられており治療法も進歩してきています。

大腸ポリープ

大腸の表面から内側へ隆起したコブ状のできものを総称してポリープと呼びます。過形成性ポリープ(良性)、腺腫(良性腫瘍)、腺がん(悪性腫瘍)などがあり、腺腫や腺がんは内視鏡で切除する治療が行なわれています。



大腸がん

60歳以上の人に多く、S状結腸や直腸にできやすい悪性の腫瘍です。特有の症状はありませんが腹痛、下痢と便秘を繰り返す、血便、便が細くなるなどの症状が出る時は注意が必要です。

過敏性腸症候群

腸が精神的ストレスや食べ物などの刺激に対して過敏になって、下痢や便秘といった便通異常を引き起こし状態が長く続く病気です。心の状態が体の症状として現れる病気、腸そのものだけでなく心のケアがとても重要になります。

◇ ◆ まとめ ◆ ◇

おなかの症状は、一時的なものですぐ治ることが多く、軽く考えられることがありますが、大腸がんなど、生命の危機につながる病気もありますので、お気づきの症状がありましたら、ご遠慮なく当院までご相談下さい。(おわり)